論　説

環　境　と　思　想

――わたしの史観――

新　津　　靖*

人類の歴史は，栄枯盛衰，興亡の跡を審らかにする偉大な叙事詩である．だが書物に記録されるとき，そのダイナミズムは影うせて，平坦な記述にとどまることが多い．

最近，歴史社会学の分野で，人類文明の波動周期説も登場しているが，人間の思想と気象の相関関係を明らかにした新津先生の学説は，気象周期説を発展させたものとして興味深いものがある．先生の専門である環境工学の領域を超越した縦横無尽の論風は，平素の雑事を忘れさせ，ひとときの静寂のあと，しばし人をして思索の杜に誘う．

本稿は，昨年の空調・衛生工学会近畿支部総会での記念講演のテープ録音であるが，きわめて示唆に富むもので，先生の許可を得てその全容を紹介することとした．なお，意をつくさない点は編集子の責任である．

1. 緒　　言

わたしは歴史学者ではございませんで，環境工学専攻のエンジニアです．しかし環境工学の立場から，人間の歴史というものを見まして，実はよくわからないことがありました．

それは昔からの大思想家が，夫々違った時代，違った場所で，何故にああいう違った思想を述べざるを得なかったのかという疑問です．

「人は環境の動物なり」という言葉があるのですから，環境を無視しては，本当の歴史はわからないのじゃあないか？……．こんな疑問から，古今の大思想家の説の背景を，環境工学的視点から眺めて見たのが，今日のテーマです．

2. 環境と思想

そこでまずはじめに，「環境」の定義を申しますと，英語ではエンバイアロンメントといいますが，「この世の中の生物体を取巻き，それに何らかの影響を与えるすべてのもの」，これが生物学上の定義です．

また，「思想」というのは，ギリシヤ語の「イデー」から出たもので，英語ではアイディアになりました．わたし共は「いいアイディアを出せ」なんて，いとも簡単な「思いつき」位に使いますが，そんな軽いもんじゃあない……．思想はまた「観念」といってもよろしいが，この定義は，「特定の歴史的時代の直面している切実，緊要な課題を解決しようとする，普遍的な方針を示す観察思念」です．

釈迦，キリスト，法然や日蓮，またマルクスの生きた歴史時代はみな違います．彼等はそういう時代において，その時代の人間が一番苦しんでいる問題を解決する普遍的な方針を夫々示しました．これが彼等の思想であり，彼等は天才的な思想家です．これを「宗（旨）とすべき教え」と言い代えれば「宗教」です．

3. わたしの史観の論拠

そこで，わたしの史観の論拠を初めに申し上げておきましょう．

① 人間も動物でして，すべての動物は環境的存在です．地球上は，人間が生れ，生きて行ける環境ですから，全く一方的に，これに依存する存在です．

② われわれが住んでいるこの自然環境を，わたしは「第1の自然」と呼びます．われわれの肉体は，この第1の自然に順応するように進化してきました．環境に順応するというのは，無意識，先天的の進化という意味で，人種の別などはこれに当たります．

③ 個人的環境や社会的環境を，わたしは

*新津　靖（Yasushi NIITSU），大阪大学名誉教授，三洋電機㈱顧問，工学博士，環境工学

「第2の自然」と呼びます．第2次大戦はわたしが起こしたんじゃあない．しかしそれに巻き込まれて，ウロチョロしました。これはわたしの責任ではないのですから，「第2の自然」といってよいでしょう．

④　こういう第1の自然，第2の自然からの刺激に対して，それに適応しようとして価値観とか，思想とか，また科学技術というような文化を生む……．適応というのは，人間が生れてから後天的，意識的に，いろいろ生きる方策を講ずることです．

⑤　ですから，順応とか適応というのは，第1の自然や，第2の自然の中で形づくられたものでして，わたし共は，そういう祖先の残した遺産の中で生きており，そしてそれに何がしかのものをつけ加えて，子孫に伝えて行く，これが人間の歴史だと思います．

人間以外の動物は順応だけですから，彼等は歴史や文化を作りません．

4. 刺激への適応

これをさらにこまかく考えてみますと，こうなると思います．

まず外界からの刺激を二つに分けますと，①強烈な刺激と，②連続的で緩慢な刺激になります．連続的，緩慢な刺激と申しますと，自然環境，家庭環境，教育環境，社会環境などが入ります．学校教育の与えるものは，まさに緩慢で連続的刺激です．人生の3分の1を学校で過ごすのですからね．

これに対して，冷害や旱ばつが長く続き，食物ができないで，生か死かというような危機や，長年にわたる深刻な社会不安，これは強烈な刺激です．人工的なものには中共やソ連でやった徹底的な学習とか洗脳というのがあります．皆さんは，そんなことをやられても，おれは大丈夫だと思っていらっしゃるでしょうが，人間というものは仕事をやめて，1年でも2年でも徹底的な洗脳をやられますと，たいていの人はそれに適応するように変わるんです．ですから，「国をつぶすには鉄砲弾は要らぬ．その国の教育をガタガタにすればよい」というのは本当です．

こういう色々な外部刺激に対して，わたし共は知識，感情，意欲によって，一人一人独特のイメージ（心像）を頭の中に描く．これが「思想」です．結局，これはその環境に適応しようとするパターンが，頭の中に形成されるということで，これを生理学の実験で見ますと，縦縞模様を印刷した箱の中で小猫を育てますと，猫の脳細胞には，縦縞パターンだけを検出するものが増えるのです．ですから，人間でも同じ刺激を繰り返えし与えますと，その刺激だけに強く反応する神経細胞回路が増大します．これが教育や洗脳の効果でして，それはどういうことかと申しますと，それによって，実は一人一人が精神的安定を得ることなんです．「思想」とは精神的安定を求めるものと言ってもよいのです．信仰，イデオロギー，生き甲斐，価値観，信念，使命感，すべて自分の思想や行動を正当化するための理屈であって，そういうふうに納得することが，われわれの精神的安定であり，これが行動の出発点です．

5. 古代気候

ここで話はちょっと飛びますが，人間の歴史を知るためには，地球上の古代気候を知ることから始めなければならん……．これがわたしの史観の原点です．古代気候を知らないと，元々動物である人間の思想なり行動の歴史はわからないと思うんです．

人間が文字を発明し，歴史を書き残してから6,000年，少なくともこの有史以来，どんなふうに地球上の気候が変ってきたか，それによって，人間の精神――思想はどう影響されたか．これが面白いのです．

さて昔の気候を調べるのに五つの方法があります．

まず①は，古木の年輪の成長幅を測定する方法です．現在，日本にも樹齢1,000年，2,000年という杉の木や檜の木がかなりありますし，屋久島には樹齢4,000年の杉の木が生きています．それを輪切りにしまして，毎年どれだけ年輪幅が増えたかを測定するのです．暖かい年はこの幅が広いし，寒い年は狭いです．この近所では，奈良の県庁の正面玄関へ入ったところ

に，太い杉の木の輪切が置いてありますが，あれは奈良の春日大社の杉で，台風か何かで折れたのを切ったものですが，樹齢580年の杉です．ですから応仁の乱，これは1,467年のことでしたから，このあたりまで，年輪の幅という目盛がきざみ込まれていますので，それまでの寒暖の変化がわかるわけです．奈良へ行かれたら，ごらんになったらよろしい．年輪法では慶応大学の西岡先生の研究による寒暖の700年周期説がありますが，気象学者や歴史家は，昔の気候なんかには余り興味がないようですね．

参考までに申し上げますが，皆さんがふだん使っておられる寒暖計は，1,714年にファーレンファイトが発明したものです．日本へはそれから20～30年たって入ってきまして，平賀源内が日本人では初めてこの寒暖計を作っております．1,714年と申しますと，それより12年前の1,702年が義士打入りの年で，従ってそれより前の気温は正確にはわからないはずです．年輪幅では，例えば寒暖計のように，26.5°Cというように精密にはわかりません．しかし，寒暖の変化の傾向は曲線で表わせますし，大体の温度はつかめます．

② しかし学問というものは実に面白いものでして，池や海の底をボーリングしまして，その泥の柱の成分の分析から太古の気候を研究した学者が何人もおります．池のそばにはいろいろな木や草の花が咲き，花粉や種が池の中に落ちる．池の底には泥が1年間に1mmとか2mmとか，少しずつ積もって行きますから，底の泥の柱を10mも採り出しますと，10万年位の歴史がこの中に秘められているわけです．花粉や種は酸やアルカリに強い殻をかぶっていますので仲々腐らない．その花は何度位の場所で咲くかわかっていますから，当時の気候がわかります．

③ また池や海には貝もいるので，泥の柱の中には貝殻も入っているでしょう．

ところで，フラスコに水を入れて熱しますと水は蒸発しますね．蒸発する水蒸気，この水の中には軽い酸素 O^{16} が多くて，残った湯の中の酸素は重い酸素 O^{18} が多いことがわかっています．そこでまず，湯の温度と，その中の（O^{18}/O^{16}）の関係を実験的に調べて式を作っておきます．

次に泥の柱の内の，何百年前の層の中の貝殻を取り出して分析します．貝殻は炭酸カルシューム $CaCO_3$ で，中に酸素がある．この貝殻の（O^{18}/O^{16}）の値を知れば，前の式から，この貝の生きていた頃，何百何十年前には，その池の水の温度は何度だったか，これからそこの気温もわかるのです．花粉の分析でも池のあたりの気候がわかります．

④ それからミジンコのような浮遊性有孔虫という小さい，小さい虫がおりますが，これは水の表面のわずかの限られた水温の中でだけ生きられる虫です．これは外気温，従って表面水温が少し変わると死んで沈んでしまう．従ってその死骸が，泥コアーの何千年前の層の中に発見されれば，その水の表面温度は何度であったか，またそのときの大気の温度は何度であったかわかるのです．エミリアーニという学者はこの方法で，70万年前までの気温の変化を曲線で表わしています．地中海，大西洋，太平洋，カリブ海，4地域の平均値で，低温が21°C，高温が27.5°C位の範囲で周期的に上下しています．

⑤ もう一つは歴史的な冷害，旱ばつ，飢饉の記録ですね．これは各国に実によく残っています．そうでしょう，人間が生きるか死ぬかの絶対危機ですからね．もちろん温度ではありませんが，不作か豊作か，寒暖の目安になりますし，その時代の人の生活，思潮がよくわかります．

6. 寒暖の変化

前にお話した五つのものを調べ，地球上の北半球の過去の気温の変動を図に表わしますと，図1の中の曲線のようになります．

気温は，朝夕はもちろん，春夏秋冬，周期的に変わって行きますが，図の曲線は長期にわたっての平均気温の変化の傾向と考えて下さって結構です．

この過去の時代の気温の変化曲線を見ますと，大体500年から800年位の周期で，寒暖交互に上下しているのがわかります．この原因についてはまだ明確ではありませんで，太陽の黒点の増減と相関性が高いという気象学者が多

い…….

寒暖の温度は書き込みませんでしたが，中央の水平線を現在の年平均気温と見ますと，暖の高い山の処でプラス2°C，冷の谷の処でマイナス2°Cと見てよいようです．マイナス2°C位何だと思われるかも知れませんが，これは大変なことなんですよ．例えば日本で8月の平均気温が1°C下りますと，熱帯植物である米というのは，収穫が15%低下してしまう…．稲の北限は北海道の北見なんですが，もし平均値より3°C下りますと，福島県以北では米ができなくなってしまう…．ですから，図1の冷の谷が平均気温より2°C低くなった時の穀物の収穫の減少，それによって人間共はどう影響されたか，実は考えただけでぞっとする状態なんです．ですから，水平線を現在の平年作，高い山は豊作，低い谷の時代は冷害，旱ばつ—飢饉と思ってごらん下さってよろしい…….

ところで現在はどうかといいますと，明治になって大正から昭和15年頃までは，まあまあいい方でしたが，最近，世界中の気象学者は，「地球は異常気候時代に突入し，1,940年以降現在までに，少なくとも北半球の平均気温は 0.5°C下った．これから40年ないし 100年に亘って異常気候が続き，少なくとも過去の例からみて，このまま寒冷気候へのめり込むのではないか？そうした異常気候の徴候のたくさんのデータが出てきた」といっております．

たとえばソ連が去年も1昨年も，敵だと思い込んでいるアメリカから，麦を5,000万トンも買わなければならないということはどういうことなのか？これはソ連が旱ばつ，冷害続きで不作であり，2億5,000万の人たちが，パンを腹一杯食べ，家畜を増やして肉も食べるには，2億3,000万トン位，麦やトウモロコシが要るのですが，それが1億7,000万トン位しかとれない…….

ご承知のように，ソ連の穀倉地帯はウクライナです．昔のカラフトの国境線は50° の線でした．この線を西の方へたどって行きますと，ハリコフ，キエフ，プラハ，フランクフルトがあり，パリー，ロンドンもこの線に近い….

まず北国で寒いということがわかりますね．ウクライナの大平原の60%はこの線の北側にあるのです．要するに北極寒波の影響を受け易いのです．雨量も日本の3分の1の，年間550mm位．従ってこのあたりからヨーロッパにかけては，4年に1度，平年作か豊作があればよい方です．

海にかこまれて温暖多雨の日本は，4年に1度位，旱ばつ，冷害のところが一部分にある位です．まずこのことを頭に入れて歴史を見なければならんのです．

中国もシベリアに接する大陸ですから，昔から旱ばつなんかが多いところで，8億の人間を食わせるのには危険が多いのです．中国といえば今年の5月，インドとの国境に近い昆明，ここは台北と同じ25° 線上にありますが，ここで雪が降りました．これは 100年来の記録だそうです．ヨーロッパもこの夏，130年振りの猛暑と旱ばつに見舞われました．35° といいますと日本では珍しくもありませんが，わたしが作った気候図表の図2をごらん下さればよくわかります．ヨーロッパにも夏という単語はありますが，日本でいいますと，5月中旬か9月の中旬が夏という気候です．もちろん一般家庭では冷房装置は不要です．これが35° に上ったのですから，パリー市民が 100万人も車で逃げだすという騒ぎになったのです．

もちろん部分的に暑い所，寒い所もできまして，最近，筑波大学で行われた「異常気象と食糧危機・国際シンポジウム」で，米国のブライソン教授は図3のように説明しています．すなわち地球の自転軸のゆれが10m位あると，その影響を打ち消すように，周りの大気は真中の図のように揺れ動く…．寒波の張り出して寒い地域と，引込んで暑い地域ができる．ヨーロッパが今年暑くて旱ばつになり，日本の方は寒冷だったのはこのためだというのです．

要するに異常気候の兆候です．

7. 寒暖と歴史

さて，図1の気温変動曲線上に，皆さんすでにご存じの歴史的事実を乗せて見ました．

わたしの驚いたのは，釈迦，孔子，キリスト，マホメット，日本では法然，親鸞，道元，日蓮，そしてマルクスまで，偉大な思想家はすべて寒冷気候の時代に出ていることでした．

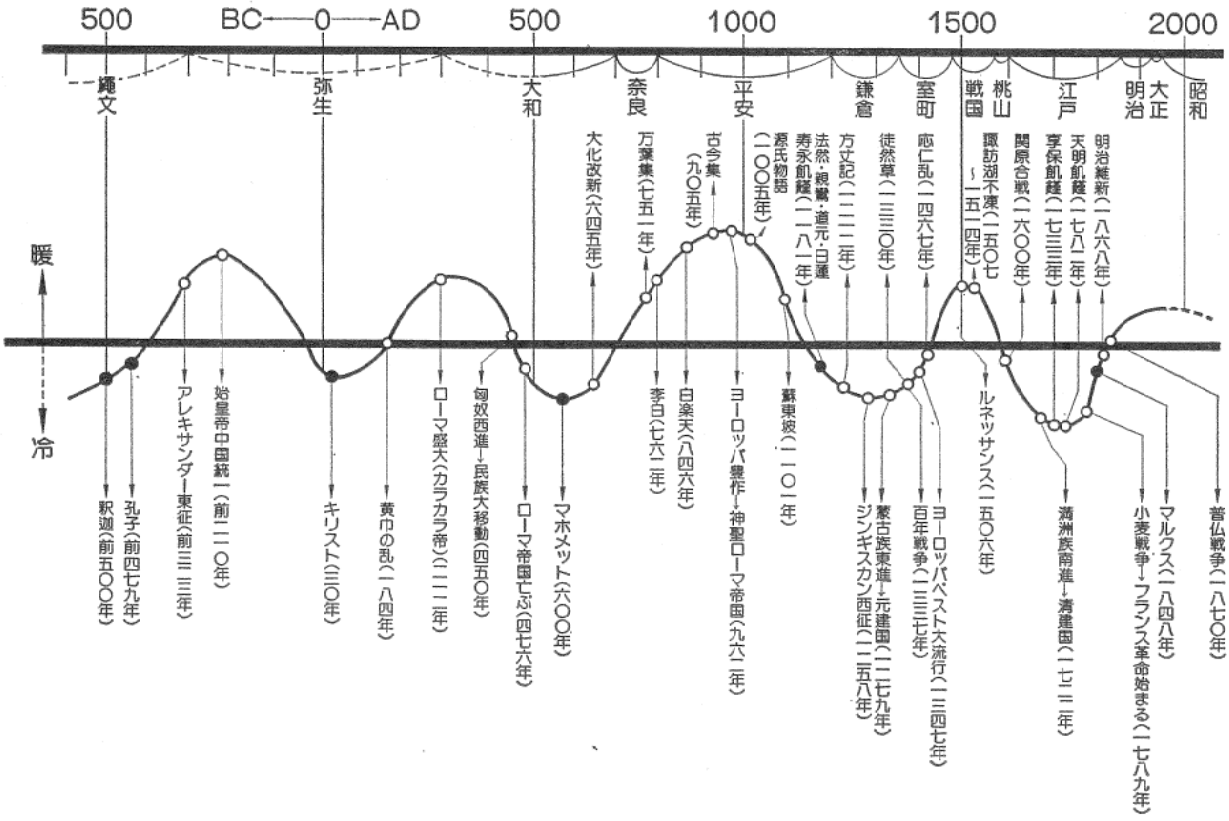

図1．気候変動と歴史

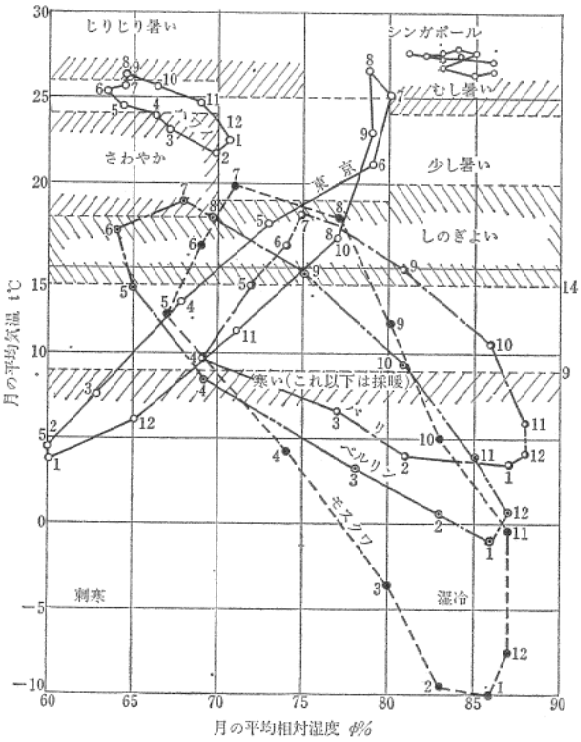

図2．東京と世界各都市の気候変化
（図中の数字は各月を示す）

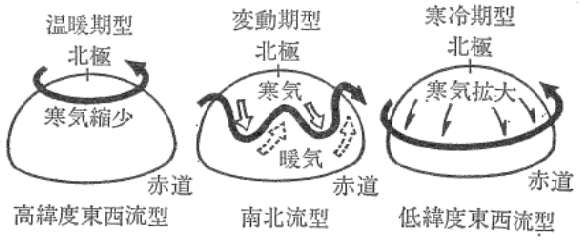

図3．北極寒波の拡がり方

今までわれわれは，釈迦の言ったこと，キリストの言ったことは実に沢山の本で読んでいますし，学校でも聞きましたけれども，どうして彼等がそんな発想をし，何故夫々の教説に違いが出たのか，こういうことは書いてないですね．釈迦と孔子のことは後からまとめてお話することにして，昔からの歴史と気候の関係を見て行くことにしましょう．

まず左の方から見て行きます．紀元前323年，アレキサンダー大王は3万5,000の兵隊をつれて中近東，中央アジア，インドまで，10年もかかって征服して歩きました．わたしは温暖な気候のために，どこに行っても食物が豊富にあり，後方からの補給の必要がなかったから，そんな大遠征ができたのだと思います．

アレキサンダーがギリシャを統一する前は，あのやせて，岩山ばかりのギリシャには，小さ

い都市国家が 200も点在し，数世紀に亘って内戦の連続でした．こういう不安定な世相が，アリストテレス，プラトンというような哲学者を生み，「人間は如何に生きるべきか」を論じさせたり，一方では気違いじみたスパルタという軍国主義を生むことになったわけです．どちらも危機的社会環境への精神の適応の結果です．

ＢＣ210年には始皇帝が中国を統一して，あのバカバカしい2,000km以上の万里の長城を築きましたが，当時の中国が非常に豊饒で，人も金も集められたからでしょう．中国は常に飢えた北方の蒙古族の絶好な奪略目標になっていたからです．それからキリスト時代が寒期，その終りの 184年に中国農民は黄色い頭巾をかぶって大暴動を起こす．これが黄巾の乱です．

8．ローマ帝国の時代

次に暖かくなってきまして，豊饒のピークは紀元 212年頃．ローマ帝国が版図も最大になり，最も盛大になったときです．カラカラ帝が大きな浴場を造り，大規模の闘技を開催して遊んだ時代です．

ところが 450年頃になりますと，ユーラシア全体は低温になり，旱ばつで，匈奴―これは蒙古人ともアーリア人ともいわれていますが，食えなくなって，南に行きますと砂漠で食物がないので，西に押し出して行きました．彼らは黒海，カスピ海の北側―南ウクライナの草原にいた半農，半牧の東ゴート，西ゴート人―これはインド・アーリア人，ゲルマン族ですが，これらを自動車の玉突き衝突のように，西方に押し出しました．このインド・アーリア人がヨーロッパになだれ込んで，スペインまで移動して行きましたが，彼等の子孫が現在のヨーロッパ人です．これが「民族大移動」ですが，当時の記録によりますと，カスピ海の水位は現在よりも５ｍも低かったといいますから，大変な旱ばつだったことがわかります．

このヨーロッパへの民族大移動が起こって，ゲルマン族がローマへもはいって行きまして，ローマの傭兵になる．その勢力増大のために，476年，西ローマ帝国は滅びることになりました．

マホメッドがイスラム教を興したのはメッカです．メッカは砂漠で暑いところですが，他の環境の飢饉などがひびいて，末端までいくと争いが起こる．結局マホメットがユダヤ教徒や多神教徒に圧迫されたのに腹を立て，ユダヤ教徒のエホバの神に代わって，アッラーの神の預言者としてコーランという聖典を残す．これが紀元 600年で，日本では聖徳太子の時代です。

9．大和・奈良・平安の時代

日本ではこの寒期の 532年から，蘇我，物部の争いが始まり，そして 645年に大化の改新が行われますが，百姓が食えなくなって，世情騒然としてくる．これは現在でいう農地開放ですね．そうせざるを得なかった自然環境と社会環境だったわけです．この後，750年頃まで凶作はずっと続いて起こっています．

次に暖かくなった時代は，奈良朝から平安朝400年間です．この時代はとても暖かい季候で，日本では万葉集，古今集，源氏物語という大文学作品が現われますが，何しろこの 400年間，死刑になった人が一人もいないと記録されていますから，本当に平安な時代だったんですね．一方中国では，李白，白楽天，蘇東坡というような文豪が輩出します．

文学，絵画というような芸術は，腹一杯食べられて，腹がくちくならんと出ないものなんですよ．生きるか死ぬかの飢餓状態では，芸術もくそもあったものじゃない．およそ文化というものは，余剰農産物が豊富で，百姓以外の仕事でも飯が食えるとい条件が満たされた時興るものですから……．

ヨーロッパでもこの時代は農産物豊饒でしてね，この時代に鉄製の鋤の使用，馬に蹄鉄を打つことが普及しまして，増産に一層貢献しました．

日本で蹄鉄を打ち始めたのは明治２年．人力車が発明された年でもある．それまで馬の足には，わらじか皮の袋をかぶせて走らせた……．テレビの時代劇で，あんなパカパカ勇ましい音を立てて走るのは嘘ですわ．

この紀元 962年に神聖ローマ帝国ができまして，これが近代ヨーロッパ成立の基礎になって

まいりました.

10. 鎌倉時代

さて，1,100年頃から寒くなりまして，日本では 1,181年に旱ばつによる寿永の飢饉が起こりますが，この飢饉は平家滅亡の原因になったものです．おごる平家は久しからずと習ったものですが，当時平家の勢力範囲は京都から西国でして，この地方が非常な凶作だったんです．この記録ははっきり残っていますが，京都市内だけで4万2,000人が餓死したんです．金持でも買う食物がない．その死体はどうしようもないので，賀茂川の河原にみんな放ったんです．しかしこのとき関東は平年作で，食物がある．押すのは今だと源氏が押してきて奈良は焼かれる．これで天下がひっくりかえったのです．

当時の近畿は，それこそこの世の地獄という絶望的様相でした．こういう時代では，わたしのようなぼんくらは，ただウロチョロして，ノイローゼになり，あげくの果ては首でも吊るぐらいでしょうが，特別な感受性と強い意志を持った天才—法然，親鸞，道元，日蓮というような人は，仏教に夫々独特な新解釈を加えて，衆生済度に挑戦します．仏教は 538年に日本に伝わったんですが，それまでの貴族仏教が，この時代にはじめて大衆の中に根をおろしました．大衆は心から救いを求めていたのです．

法然，親鸞の「専修念仏」，道元の「只管打座」，日蓮の「唱題成仏」という彼等の説については，本を読んでいただくことにして，最初に申し上げた「思想」の定義を思い出していただきたいのです．特定の歴史的時代の切迫した問題の解決指針……まさにこれですね．

さて一方では，こういう悲惨な状態を見て，文学的才能があって，ひと1倍感受性の強い人—鴨長明とか兼好法師といった人は，「方丈記」や「徒然草」に彼等の人生観を述べました．「行く河の流れはたえずして，しかももとの水にはあらず……」という人生泡沫論，これはまさに悲観文学ですね．

昔，入学試験の勉強時代に，一生懸命読んだものですが，字句の解釈ばかりで，その時代背景など全くわかりませんでしたが……．何しろあきらめムード，遁世ムードで，当時の大衆は，汚土の現世から浄土の来世へ早く，という気持だったようで，自殺する人も沢山でたんです．

この時代の中央アジアもまた旱ばつで，ジンギスカンは中近東の方へ飛び出し，そして東の方の蒙古族は中国に飛び込んで，中国を征服して，元という国を作ります．食糧難という危機は人間に恐るべき駆動力を起こさせる…．その元が日本にも攻めて来ましたし，ベトナムまで入って，トンキンだの安南という国を作らせたのです．

日本では 1,338年に南北朝の内乱が起こり，1,467年が応仁の乱です．この時代もひどい凶作で，京都，奈良の餓死者8万人と記録されています．

木曾の御料林の太い檜の木の年輪で，1,330年から1,350年まで，毎年何mmずつ成長したかを計かった記録によれば，1,337年はたった0.8mmしか年輪が延びない非常な寒波の強い冬でした．気候が暖かいと1年に2mmぐらい延びます．その1,337年に何が起こったか？この1月は新田義貞の軍勢が北陸を攻めたときで，琵琶湖の北，今の敦賀へ抜けるトンネルのあたりで，実に 7,000騎の兵隊が凍死しているんですよ．雪と寒波と食糧補給難で凍死，餓死ですね．

一方，ヨーロッパではこの 1,337年に百年戦争が起こり，10年後にペストの大流行です．当時ヨーロッパの全人口は約1億でしたが，その内，4分の1の 2,500万人はこれで死んでいます．ペスト菌はネズミについているノミが持っているのですが，中近東の旱ばつで，人間と一緒にトルコの方からヨーロッパに入ったのです．当時はその原因がわからんものだから，魔女の故だなんて言って，若い美人の娘を10万人も殺したんです．無知蒙昧というのは本当に恐ろしいです．

さて，1,500年の前後100年位は温暖期になりました．ヨーロッパではフィレンツェからイタリー・ルネッサンスが始まり，金持の商人，貴族というスポンサーを得て，ダビンチやミケランジェロが活躍します．ヒューマニズムの芽生えですが，まだ貴族的なものでした．

日本はどうだったかと申しますと，わたしは長野県人ですが，諏訪湖は大体毎年30cm位の氷が張りまして，「御神渡り」という現象が起こるんです．この記録は神事として昔から続いて残っているのですが，1,507年から1,514年まで，諏訪湖は全然氷が張っていないのです．わたしは信州育ちで，どうしておれの祖先はあんな寒い山の中に定住したのかと恨んでいるんですが，あの寒い海抜760mの諏訪湖が凍結しなかったというのですから暖かかったんですね．

11. 徳川時代

さて1,500年代の末頃からまた寒くなって参りまして，1,600年には関ヶ原の合戦．これはやはり究極のところ，自分の勢力範囲を広げ，腹一杯食べたいという食糧争奪，国盗り合戦だとわたしはにらみます．

そして寒冷だった徳川270年にはいるのですが，中国では1,722年に満州族が飢えて南進し，中国を征服して清朝を作ります．

日本では1,733年に享保の飢饉と疫病，1,782年の天明の飢饉と続きます．この時，奥州1か国で20万人も餓死しているんです．人肉さえ食べたというのですから，現代のわれわれには想像もつかない悲惨さです．この徳川270年の間に，大規模な飢饉は実に20回も起きていますし，百姓一揆は1,600回も起きている……．天下太平の徳川時代と教わりましたが，将軍様は太平だったかもしれないが，人民の苦しみは大変なものでして，鎖国をしているので，食物がなくてもよそにも出て行けない．それではどうするか？　食いぶちを減らすために，生まれる子供の間引きです．

人口増加を見ますと，秀吉のころ大体2,600万人位，これが徳川時代ずっと増えないで，明治の開国から急に増大し始めます．食物がなくて自分の子を殺すという大衆にとっては本当に苦しい300年でした．幕府はそこで，艱難，辛苦に耐え，勤勉，節約こそ人間修養の道であり，貧乏は恥ではないぞという儒教（朱子学）の寺小屋教育を普及させたのです．

百姓が苦しいということは，農本主義の幕藩体制も弱くなる理屈です．明治維新は偉い人が出て体制をひっくりかえしたといいますが，もちろん火つけ役ではありますけれど，本当のところ，徳川幕府はもうよたよたになっていたのです．そこへペルリの開国強要や，革新青年連中の決起があって，1,868年すなわち明治元年の維新となるわけですが，背景は寒冷期の生活難，社会不安，危機感だと思います．

明治元年で思い出しましたが，ハワイへの移民の最初の日本人を「元年者」と呼びました．維新の頃凶作でして，ドッとハワイへ出て行ったのです．当時はまだ寒期を脱しておりません．

一方，当時のヨーロッパはどうであったか？1,789年にフランス革命が起こりました．フランス革命は何故起きたのか？

当時フランスの人口は2,300万でした．ところが，フランス国土の40%を貴族と教会の牧師，約50万人が所有し，彼等は無税で，年金さえつくんです．残りの国土を2,250万の百姓が分けて持って，税をとられる．それこそギリギリの5反百姓ばかりという状態でした．

1,850年頃描かれたミレーの代表作，「晩鐘」，「落穂拾い」を思い出して下さい．当時の貧しい農民の姿がよくでています．牧歌的な農村風景と見たら間違いで，彼のこの農民苦闘の構図が，革命への教唆ととられて弾圧されたのです．

そこへ低温と，ひどい降雹のために小麦の大変な凶作が起こりまして食糧危機，そして失業者，浮浪人があふれました．小麦は騰貴し，百姓は食えないで，小麦粉戦争になる．怒った百姓がパリの市民を巻き込んで，バスチーユの監獄をたたき壊わして政治犯を釈放する．大正の始めの米騒動を思い出しますね．女房連が先頭を切って，ベルサイユの宮殿に押しかけて，ルイ16世と皇后マリー・アントワネットをパリーへ引きずってきてギロチンにかける．これがフランス革命の口火でして，これに産業革命が重なったわけです．

産業革命は農業社会から工業化社会への転換期ということで，人類がはじめて経験する生産体系です．これをどうコントロールしたらいいのかわからない．アダム・スミスは「労働者の

生産性を高めるには，完全に自由競争をさせ，政府はこれに一切干渉しない方がいい」という「富国論」を出しました．そうなると世の中はてんやわんやで，資本家だけべらぼうに金儲けをしてブルジョアになり，労働者は搾取されてプロレタリアに転落して，富の分配の不公平な階級化がはっきりしてしまう．

当時プロレタリアの定義は，「鉄鎖の外に奪うべき何物も持たない肉体労働者」というのでしたが，産業革命の初期，マンチェスターの紡績工場では，7～8歳の子供まで雇って，10時間以上も働かせた．子供があきて逃げないように，鎖で足を機械につないで働かせたのです．そうしますと，現代はプロレタリアなんて人は一人もいないわけですね．

そしてフランスでは，ずっと流血革命が何回も起こるわけです．1,862年に出版されたユゴーの「レ・ミゼラブル」は，この時代の悲惨な世相をよく表わしています．ユゴーは「王なき国家，経典なき宗教，国境なき人類」を主張して，ナポレオン3世と衝突し，英仏海峡の小島に19年間も亡命していましたが，国王の専制，教会の横暴，彼等の大土地の私有が腹にすえかねたのです．

一方，ユダヤ人のマルクスは，こういう混乱，悲惨な社会状態を見て，「人間の歴史は階級闘争だ．政治も経済も物で動く．人間の心も物で動くんだ」という弁証法的唯物論を打ち出して，1,848年に友人のエンゲルスと一緒に共産党宣言を発表しました．「もう社会革命によらなければ，このままでは大衆は生きて行けない」という危機感からです．この前の年にも大飢饉でして，ヨーロッパの全餓死者は100万人を越しました．イギリスのアイルランドでは，1,840年前後，ジャガ芋が全滅で，160万人が大挙してアメリカへ移住しました．郷里の墓場という墓場は，飢饉による餓死者で埋まってしまったのです．マルクスが共産党宣言を出した1,848年，アメリカではカリフォルニアのゴールドラッシュがピークに達していた時でした．

コンミュニズムというのが共産主義．私有財産を認めない，そうすれば階級闘争のない理想社会ができる．資本主義では究極的にはブルジョアは自滅し，プロレタリアが天下をとることになる……という予想を発表したわけです．

要するに産業革命後の，野放図な自然発生的資本主義の罪悪面を見て，これに管理と，富の分配の平等性を持ち込もうとしたわけです．

彼の宗教否定は，「神が人間を作ったのではなく，人間が神を作ったのだ．そんなものに奉仕する代わりに人間に奉仕しなさい．ここに生き甲斐がある」という彼の先生のフォイエルバッハの説から出発しています．ですからマルキシズムは，「無神論的ヒューマニズム」には違いありませんが，平等であるためには，必ず自由を犠牲にしなければ成り立ちません．人間から自我，すなわち精神の自由を奪ったらどうなるか？

精神の自由の内で重要なものは想像と空想と幻想の自由だと思います．これこそ，より良い環境を作り出そうとする意欲――科学技術や情緒の世界，芸術――を生み出す源泉であり，想像力こそ創造力だからです．これを抑制しますと，「批判はならぬ．お前ら黙ってついてこい」式の共産主義国の全体主義政治になってしまいます．

当時，ヨーロッパでは自然科学が急速に発達し始めましたので，「おれの説は科学的だが，今までのものは空想論だ」と，理論武装で自説の絶対性を強調したんですが，いまだに「科学的社会主義」なんて力んでいる教条的権威主義の国もある…….

現代のように，人口爆発，環境汚染，資源の枯渇というような，人類の未来に暗雲を投げかける大問題の起きている時代，もしマルクスが生きていたら，別のイディオロギーになっていたでしょうね．

ヨーロッパの科学技術の先駆的発展は，1,640年のデカルトによる「分解―解析―合成」という方法論の着想もさることながら，ヨーロッパの歴史を見ますと，あの狭い所の戦争連続史ともいえます．キリスト以来，大戦争を120回もやっていますので，その流血の危機感も，科学技術の発達を促進し，近世になって，カール・ベッカーの言ったように，「相手の頭を武器でたたき割るより，相手の頭数をかぞえて決める方がよい」と気がついて民主主義を生み，最近

になって，「もうヨーロッパ人同志，戦争はやるまい」と，EEC や EC を生み出したのだと思います．何しろ第1次大戦で 950万，第2次大戦での全戦死者は 2,206万でしたから…….

わたしはここで思想論を述べるつもりはありませんが，過去の偉大な思想家の言わんとするところは，その歴史時代の混乱した悲惨な社会状態に対する危機感からの発言であるということにご注意願いたいのです．

わたしの考えでは，現代は，こういう大思想家や大政治家の出ない時代だと思うのです．人間というものは何時の時代でも，欲求不満を並べ立てて，ブツブツ不平を言って暮らす動物ですが，現代人は，昔の天才的な大思想家の出た時代の寒冷季候から引き起こされた悲惨な社会状態とは比べものにならない豊かな生活をしており，平和でゲップの出るほど食べられる時代に栄えるものは，ファッションやあらゆる享楽産業．そして大衆は欲望の自然主義に陥り，価値観バラバラの多様化時代だからです．それが証拠には，フランス革命10年間に輩出した偉才—モンテスキュー，ボルテール，ジャン・ジャック・ルソーというような啓蒙思想家の数は，その後，フランスが平和になってからの 100年間の数に相当すると言われていますので…….

12．旧約，新約の時代

それではもう一度大昔にかえって，ユダヤ人やユダヤ教はなぜできたか？…….

セム族のユダヤ人の祖先が，乳と蜜の流れるカナーンの地，現在のイスラエルへメソポタミヤから移住してきたのは紀元前 1,500年頃でした．イスラエルの南部のユダ地区に最初に定住したのがユダヤ人という名前の起こりです．

ところがここに大旱ばつが起こりまして，みんな肥沃なエジプトのアレクサンドリアへ逃げ出しました．そこで彼等は永年ハム族のエジプト人の奴隷として酷使される．モーゼが見兼ねて，彼等をシナイ半島へ連れ出して，40年間の苦しい砂漠の遊牧生活の間に，奴隷根性におちぶれた彼等に，民族意識を復活させて，再びイスラエルに帰してやろうとしました．そのために，神の啓示としての十戒と選民意識をたたき込んで，意識革命，すなわち洗脳をやったわけです．

この「神の恩寵を約束されたのは自分達だけ」という選民意識が，彼等を不死鳥のように強い民族にしましたが，一方，また彼等に排他性と非寛容性を植えつけて，今日まで彼等が世界中どこへ行っても嫌われ，自分達も苦しむ原因になるわけです．

前 1,200年頃，古巣のイスラエルへ帰ったのですが，キリストの時代になって，当時ローマの支配下にありましたので，ユダヤ教徒が2派に別れて争うことになる．ローマ軍の苛斂誅求と兄弟相克，こういう社会不安に刺激されて，キリストは絶対愛（アガペー）と社会正義を説く…．そして選民意識を打破して，教義の拡大解釈を計ったわけです．キリスト教が後から広く普及したのはこのためです．

まあ春秋の筆法をもってすれば，イスラエルの旱ばつ，飢饉がユダヤ教を誕生させ，イスラエルの社会不安がキリスト教を誕生させたことになります．

13．釈迦，孔子の時代

さて，釈迦も孔子も同時代ですが，どちらも寒期から抜け出していない時代の人です．当時中国には 2,000もの都市国家がバラバラにありまして，互いに弱肉強食の春秋戦国時代でした．人口増加，そして食糧の争奪戦で，この頃インドでも中国でも，鉄器の使用が普及してきまして戦争を一層残忍なものにしました．

天下麻の如く乱れた乱世という悲惨な社会状態．それを孔子が見て，この浅ましい人間相克を救うにはどうしたらいいか，彼の儒教なるものは宗教ではなく，政治理念ですが，王は王らしく仁政を，人民には家中心の孝悌の道を，修身，斉家，治国，平天下という形で説いたわけです．こういう下克上の乱世でしたから，孔子の外に「諸子百家」といわれる沢山の思想家も輩出しました．

さて一方，当時のインドには16の都市国家があり，貧しい中央アジアのアーリア人も，ガンジス河の稲作地帯にまではいってきまして，こちらも不穏な形勢です．釈迦の隣国のマガダ王

国の勢力伸張も中部インドに大きな動揺を引き起こし，釈迦がまだ生きている内に，彼の故郷の釈迦族は，このマガダ国に攻撃されて壊滅してしまう．こういう不安な時代に，29歳の若い釈迦は，平和な社会改革をめざして，徹底した無常観を説き，精神的修業によって，まず個人の安心立命を主張しました．いわゆる小乗仏教です．

彼の教説は実に穏和寛容で，大衆に対する仏罰なんてことは全く言っていません．これは後世の坊主がつけ加えたものですし，地獄，極楽は墨子が言い出したことです．これを「加上」といいます．

ところが旧約聖書の方には，もし十戒を破ったら，お前の子孫まで2代，3代に亘って呪ってやるぞと書いてあります．仏教のこの寛容さは，実は仏教の弱点とも言えるものですが，ユダヤ教，キリスト教，イスラム教という1神教の方は，強烈な迫力を持つ代わりに，どれも非寛容で排他的な所があります．異端だの邪教なんて言葉は仏教にはありません．マホメットの遺言は，「アラビアに二つの宗教の存在を許すな」というのですからね…….

こういう排他的な面を持つキリスト教というヨーロッパの1神教地帯であったからこそ，マルクス主義という，これもまた非寛容，排他的なイディオロギーが生まれたのだと思います．「1神教」が「1信狂」を生んだ……とわたしは思うのです．

わたしはメソポタミアやアラビヤの，羊の食う20cm位の草だけがポツン，ポツンとしか生えていない，あの荒涼索漠たる砂漠を歩いて見て，あの「禁欲的な教義」や「神は人間が生きるために自然物を作った」というモーゼの発想，それからまた，余りにも自然の豊富な東南アジアを歩いて，「殺生禁断」，「万物一如」，「輪廻」という釈迦の発想は，どちらもそこの気候風土を原点にしたものだと思いました．

食物や風俗，習慣はもちろんのこと，文化も同様だと思います．

14. 文化のダイナミズム

京大，哲学科の上山教授は，日本の文化には外向的と内向的の周期性があると言っております．600年頃から900年頃まで遣唐使をどんどん中国へ出した外向的な文化吸収期，1,200年あたりから，鎌倉幕府に始まる武家政治確立の内向的時代，1,543年の鉄砲伝来に刺激されて，宣教師の布教許可，明船の出入など，やや外向的になり，やがて徳川300年の鎖国，内向時代に入りますが，それから1,800年以降明治の欧米文化吸収という外向的時代に転ずるという区分です．

図1の気候変化の曲線にこれを重ねて見ますと，暖期と寒期がその駆動力になっているように見えます．これを拡張しますと，大思想家はすべて，それぞれの国の寒期，内向的苦悶時代の人ですね．

しかし1,620年のメイフラワー号から始った，行き詰ったヨーロッパから，新天地アメリカへの600万の民族移動は，寒期外向的駆動力でしょうか？前に申し上げた，ヨーロッパへの民族大移動，蒙古人の中国侵入，またアーリア人のインド侵入もみんなこれでした．

こうみますと，歴史がダイナミックなものに見えます．

15. 環境への適応

ここで今までの話を要約いたしますと，動物である人間は，食物がなくなって飢餓状態に陥ることほど苦しく恐ろしいことはない……．自然環境の悪化，食料不足，それに人口増加などから，必ず生活不安，社会混乱という危機感が激発され，天才的な思想家はこれに刺激されて，生きようとする個人と集団との関係をどう調和させるか，すなわち「一即多，多即一」の原理を教義として説いたのですね．この原点では万教同根ですが，その教義の内容には，それぞれ，そこの自然環境，それからその時代の社会環境の影響が多分に含まれております．

従ってニュアンスが皆違っておりますが，どれもこれも，死を自覚する唯一の動物である人間の，「生への執着の絶叫」であることは真実だと思います．もともと宗教心というものは，自分の生命が有限だと知っての怖れ――この「予知の苦悩」から解放されたいという感情と，自分の生存が，どんなに自然や社会に依存して

いるかということの自覚から起こるものですから……．日本語の「宗教」は結果を表わしていますが，英語の「レリジョン」の語源は「怖れ」という意味です．

そしてその教説を述べるに当たって，神という幻想的イメージを入れた人もおれば入れない人もおる……．釈迦，孔子は神という言葉を使いません．孔子などは「われ未だ生を知らず，いずくんぞ鬼（霊魂や神）を知らんや」といって，てんでバカにしています．霊魂否定ですね．

古代ギリシャ人は，いろいろの神を想定しましたけれど，神が人間に啓示や黙示をたれるとは考えませんでした．

ユダヤ教，キリスト教，イスラム教という砂漠の宗教は，1神に絞って，その神の言葉として，預言者が聖書やコーランをまとめました．マルクスは先程申し上げたように無神論者です．

素朴というか，無知蒙昧というか，古代人にとって，すべての自然現象は，全く玄妙不可思議なものに見えたに違いありません．何故こういうことが起こるのかと思う時，「誰かが陰で……」と考えて，超自然的な神というものを想像したのはわかります．自然への擬人法の適用——これが一番楽な納得法だったのでしょう．これが世界中どこの民族にもあった自然宗教における神概念の出発点でして，生への模索の過程で，どの民族も，実に沢山の神というものを作り出しました．

そして動物はただ自然を「恐れた」だけですが，霊魂を持つと考えた人間は，これを「畏れた」のです．そして畏敬は感謝と祈願の心に，畏怖は自己反省の心に転化したのだと思います．

現代のように，科学が進歩しますと，この森羅万象を創造，支配するある「偉大な法則」というものがあると考える．その法則を「神」と呼んでもよいのだと思います．西田哲学にも「森羅万象，神の所作物にあらず，神の表現なり」，そう書かれていますが，インド哲学の「諸法ありて実相あり」と同じですね．

16．天才の家庭環境

さて，今まで申し上げた偉大な思想家はどうして現われたかの分析で，もう一つ原因があるように思うのです．それは天才たちの10歳ぐらいまでの子供の時の家庭環境です．

まず孔子は2号さんの子供で，小さいとき父は死んでいます．少したって母も死にました．キリスト，これは親父が初めからないことになっていますが，アダム・スミス，ニュートン，ニーチェ，ペスタロッチ，チャイコフスキー，ルビンシュタイン，ゴーギャン，サルトル，ジード，バイロン，みんな小さい時，父親が死んでいます．

母親が死んだのは，生まれて7日目という釈迦．すぐに後妻がきて男の子を産んだ．その後妻とお釈迦さんの仲が悪かったかどうかわかりませんが，しかし自分は皇太子であるが，後妻の子供に王位を譲ろうとして出家したという推定を述べた本もあります．デカルト，パスカル，ラボァージュ，キューリー，ベートーベン，モーツァルト，ダヴィンチ，ミケランジェロなども母親が亡くなっています．

それから幼い時に両親とも死んだのがマホメット，法然（父は殺害，母は行方不明），親鸞，道元，蓮如ですが，育てる人がいなくなったので，子供の時に寺へ放り込まれたのです．ジャン・ジャック・ルソー，ヴォルテール，トルストイ，ラファエロ，ダランベール（これは捨子），バッハ，ゴーリキ，バートランド・ラッセル，チャップリン，川端康成……．

川端康成はマホメットと同じ境遇でしたね．彼は5～6歳になるまでに両親が死に，祖父母に育てられ，わたしの家の近くの茨木中学にはいりましたが，12歳頃祖父母も亡くなって天涯孤独になってしまいました．

こういう子供の時に親を失うということは，大変な不幸だと思います．もの心ついてからの淋しさはどんなかと思いますし，これは彼等の精神に必ず影響すると思います．

さて，マルクスは貧しいユダヤ教徒の息子です．16歳のときにプロシャの男爵の娘で20歳になるジェニーに恋をしまして，彼女はプロテスタントです．当時ユダヤ教徒がプロテスタントと結婚するなんてことは考えられないことでしたし，第1，ユダヤ人は自分の土地も持てない，官職にもつけない時代でしたから，この

結婚は大変です．しかし彼らの恋愛は熱烈でして，10数年たって結婚するのですが，そのために彼はプロテスタントに改宗します．

彼の宗教否定は，唯物論者ですから当然ですが，彼の言った「宗教のごときものが存在せざるを得ない社会制度が悪い．だから宗教を否定する」という言葉の中に，ユダヤ教徒として差別され，また彼等の結婚を苦しめた恨みがはいっているようにも思うのですが…….

また日蓮は千葉県小湊の恐ろしく貧乏な漁師の子で，12歳のときにロベらしに寺に放り込まれたのです．

偉大な業績を挙げた人全部を調べたのではありませんが，何といっても子供の時は弱い．親こそ正に子供の命です．片親や両親を失う……これはその子の人生の大問題でしょう．

17. 危機からの脱出

こういうことから，わたしは次のような結論が出ると思うのです．

まず自然環境の危機，社会環境の危機，プラス家庭環境の危機というようなトリプルパンチをあびたときに人間はどうなるか？

まず①に，そういう不安が人間を極度に真剣にさせるでしょう．何としてでも生きぬく道を考えざるを得ない….

②，頼る者が一人もいないという環境は，自律，独立心を盛り上げる．ひとに頼らずに自分の力で生きぬこうとする….

③，そして，危機脱出のための旺盛な意欲と行動力を振るい起こすでしょう．

④，さらに自己防衛のために，一事に執念を燃やし，徹底的にある問題を追求して行く….釈迦やキリストは，そのために一生を完全燃焼させた人だと思います．精神を1点に向かって絞った人は強いです．

こういうわけですから，天才というのは，ある意味ではマニア，偏執狂といってもよいです．そこで精神分析学では，天才狂人説が出るんです．

しかし，外界の危機とは別に，当人が人一倍強靱な意志と強い感受性，正義感の持主であることも重要条件だと思います．ピンと頭にくる直感力がなければだめだと思います．

それから，こういう天才的，独創的思想家の共通点を上げよといわれますと，まず①に，大衆の間にすでに現れている苦悩，願望をピンと感じとり，その精神的対応策を普遍的思想として表現した人だと思います．

われわれが昔習った歴史では，こういう人達の言動だけ聞いて，彼等が何故そう言わざるを得なかったかという時代背景などは，何も教えてくれませんでしたね．彼等は突然，平穏で豊かな時代に生れたのではなくて，苦脳にあえいだ時代の大衆の心を代弁し，救済の指針を示したのであって，そういうデータを与えたのは，その時代の名もなき大衆だということ….

②に彼等は，常に権力側につかず，無力な庶民の側について，彼らの考えを察知し，意見を代表しました．福沢諭吉が爵位や勲章も断わり，官職にも全くつかなかったのと同じです．

この二つが天才的思想家の共通点です．

18. 結　　論

最後にわたしの史観の結論を申し上げます．

まず①に，歴史を作っていく者は，特定の個人ではなく大衆だということです．どうも今までの歴史は，中央にいた権力者や権威者の側から見た記述で，底辺の大衆側からの歴史があって然るべきだと思うのですが…….

②に．大衆に行動を起こさせるものは，生死にかかわる生活不安と，それから起きる社会混乱です．最近の例をあげますと，1,953年の東ベルリン暴動，56年のポーランド，ホズニナ暴動，それからハンガリー動乱，70年のポーランド食料暴動など，どれも「食料や日常必需品の極端な欠乏や高騰」，「人間らしく生きたいという願望」が直接の動機です．ですから，天下泰平で腹一ぱい食えるときは，たいした指導者はいりません．繁栄に慣れたアメリカの大衆も，強い大統領を求めないようになったといわれています．日本民族も開闢以来の泰平，鼓腹，そして自由の時代を迎えましたが，同時に，爛熟と腐敗の進行することも歴史の証明するところ…….

よく天才，英雄待望論が起こりますが，こういう天才はいた方がよろしいが，天才や英雄の出

現を待望するような時代というのは，とても苦しい危機的社会環境であって，そんな世相はご免こうむりたいのですが，「艱難汝を玉にす」で，艱難が玉を生んだのです．「国乱れて忠臣出ず」も同じで，こういう諺や格言は昔から沢山ありますが，みんなその時代の価値観の反映，つまり小思想だと思います．

そして生活苦を伴う社会不安の時代には，安直な現世利益という「御利益」を説く，怪し気な新興宗教なるものも必ず現われますね．溺れる者は藁(わら)をもつかもうとする人の，弱点便乗教義を思いつく天才かも知れませんが…….

③に，そういう社会不安の原因の一つは，異常気候による穀物の凶作でした．冷害，旱ばつ，そして飢饉という世相混乱の時代には，必ず立ち回わりの早い人，お人好しという個人的特性がはっきり出まして，貧富の差，権力の偏在が起こり，内戦なんか始まって，大衆は一層危機感をあおられて，パニック状態に陥ることもある…….

③，そういう危機感が天才を刺激し，思想（価値観）を生む．その思想なり，価値観なりが，あとからの人々にアピールして，歴史というものを作っていくのだと思います．

釈迦やキリストの思想は，途端に天下に普及したものではありませんで，「偉人郷里に容れられず」で，むしろ気違い扱かいされ，迫害を受ける位です．法然は土佐に，親鸞は越後に流されました．孔子は失意の内に死にましたし，キリストは殺されました．ですから，啓蒙時代なんていって，偉い人が出たから，大衆の目は開けて行ったなんて言いますが，それは後世のことであって，混乱期の大衆は，それこそ明日の飯のために目の色を変えて右往左往．「馬の耳に念仏」だったでしょう．敗戦直後がそうでした．

最後に一言申し上げたいことがございます．科学技術や政治，経済の方面は，現代のように変化が早く激しい時，天才的業績なんて言われましても，100年，いや50年もたてば古いものになり，忘れ去られてしまうでしょう．

しかし，偉大な思想家の教説は，1,000年，2,000年という時代の流れを越えて，今なお，われわれの魂をゆさぶるものを含んでいると思います．それは古今，東西を問わず，それぞれが人間性の根源に触れるものを持っているからだと思います．詩人のりっぱな作品や画家の名画も同様です．

それからもう一つ…….

図1の上の方の一目盛は100年，1世紀です．人間，100年生きる人は稀です．誰もがその短い一生を，最良，最善に生き抜こうとアクセクするわけですが，それにもかかわらず，その背景にあるその時代や環境—「第2の自然」の重みというか，運命というか，これをつくづく考えさせられます．

そして古来，偉大な人物というのは，みんなこの運命に果敢に挑戦した人でした．簡単に申しますと，ひとが避けて通ろうとする困難を，自分から買って出るか，出ないか．これが凡人と偉人の分かれ目のようです．

「そういうお前はどちらか」と申されるなら，後悔，慙愧，も早手遅れですと，お答えするしかありません．

今日は，環境工学の延長として，環境と思想の1断面を，おこがましくも「わたしの史観」という副題の下にお話いたしました．どうかご批判下さい．

長時間，ご静聴ありがとうございました．